



## 昭和16年夏の敗戦

猪瀬直樹著

中央公論新社 2010（中公文庫）

所蔵館 請求記号

生田分館：X/080/C64/Ino

神田分館：/210.7/I56

### 【著者プロフィール】

猪瀬直樹（いのせ なおき）

1946年11月20日生

元政治家 第18代東京都知事

1987年「ミカドの肖像」で第18回大宅壮一  
ノンフィクション賞受賞

## 坂 誥 智 美 （法学部准教授）

昨年の2016年は、太平洋戦争終結からは71年目であったが、開戦から75年目ということもあり、日米両国において色々な催しがなされたことは記憶に新しいのではないのでしょうか。無謀と思える戦争がなぜ起こったのかについては様々な見解があることを、また、戦時下の生活の大変さや空襲や原子爆弾の投下によって、多くの非戦闘員が落命したり、傷ついたことは、高校までで学んできたことと思います。

では、「日米決戦になれば日本は必敗する！」という結論が、開戦の3カ月あまり前にすでにわかっている、当時の内閣総理大臣（近衛文麿）もそれを知っていた…という事実があったこと、みなさんはどう思いますか？

この本は太平洋戦争開戦直前に作られた「総力戦研究所」という機関に集められた、将来を嘱望されていた30代の学生たちが、研究の一環として行われた模擬内閣の中で、机上シミュレーションによって「開戦必敗！」という衝撃的な結論を導きだすまでの葛藤を記した、ノンフィクション

的なものです。第一次世界大戦以後、戦争は軍隊だけでは勝利できない「総力戦」の時代となりました。「総力戦」とはいかなるものか、官僚も軍隊も把握できていなかった中で、研究所では30代の学生たち（彼らは様々な機関から寄せ集められていました。官公庁や軍隊などの中堅官僚・幹部、他に日本銀行・日本製鐵・三菱鉱業・日本郵船・産業組合中央銀行・同盟通信などの中堅社員）は自分たちの持つ知識と資料とネットワークを通じて様々な情報を入手し、「開戦必敗」の結論をたたき出します。結論は本物の内閣の前で発表され、その内容は戦果・被害・敗戦する年度とその理由など多岐にわたりますが、歴史的事実を知っている私たちにとっては驚くべきものがあります。

これだけの結果を見通していたにもかかわらず、なぜ戦争が止められなかったのか、本当に悔やまれます。現代も世界全体が先行き不透明な時代。この本をきっかけに、みなさんに色々考えていただける材料になれば良いなと思っています。